

ひょうご 水百景

No.221 明石港（明石市）

～初代明石藩主・小笠原忠真が築港～

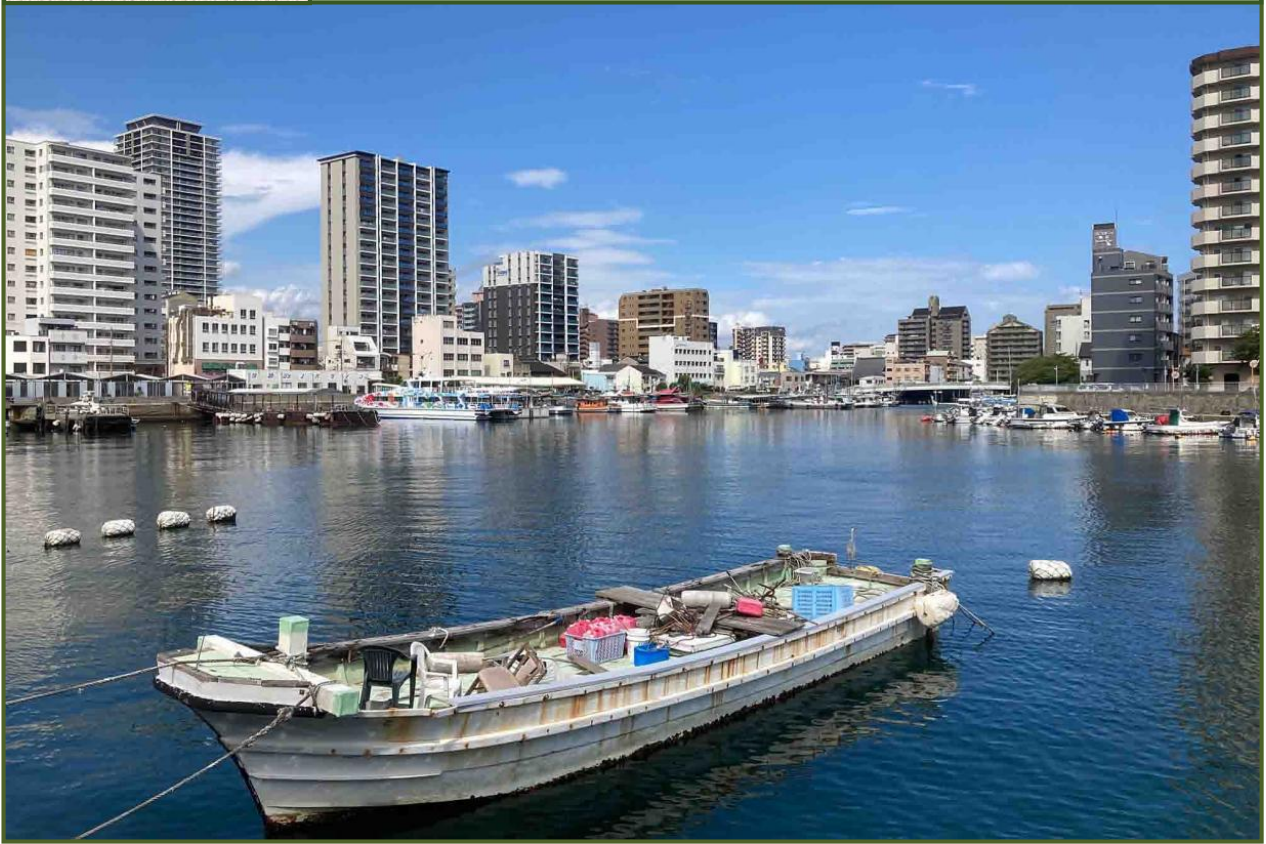


写真-1 明石港（令和6年8月撮影）

■ 江戸時代に築かれた明石港

写真-1 は、一般県道 211 号明石港線から明石港（地方港湾管理者：兵庫県）を撮ったものです。右前方に見える橋が錦江橋（さんこうばし）で、左前方に見えるのが明石港と淡路市の岩屋港を結ぶ淡路ジェノバラインの乗船場です。

また、右の空中写真（写真-2）は昭和 21（1946）年に米軍が撮影したのですが、フェリーの乗船場も現在の明石市役所庁舎もまだできていません。そして、明石港は東の半分が既に埋め立てられています。



写真-2 明石港（昭和 21 年米軍が撮影）

■ 初代明石藩主・小笠原忠真が明石城を築く

慶長 8（1603）年、江戸に幕府を開いた徳川家康は、京・大坂を西国大名から防衛するため、畿内の入口に当たる播磨国姫路藩主に池田輝政を置きます。西国将軍と呼ばれた輝政が慶長 18（1613）年に死去、跡を継いだ長男の利隆も元和 2（1616）年に病死すると嫡男の光政が幼少だったため、西への押さえは姫路・明石・尼崎の三段構えとし、そこに譜代大名を配置することになります。

元和 3（1617）年 7 月 14 日に徳川四天王の一人で伊勢桑名城主の本多忠政が姫路藩に 15 万石で入封します。そして 2 週間後の 7 月 28 日に忠政の甥にあたる小笠原忠真（たださね：この頃は「忠政」であったが、本多忠政と同名で紛らわしいので晩年の名「忠真」とする）が信州松本（8 万石）から 2 万石の加増を受けて新設の明石藩に移封となり、明石川右岸の船上（ふなげ）城に入城しました。また、尼崎藩には同年 7 月戸田氏鉄（うじかね）が近江国膳所（せぜ）から 5 万石で入封しました。

そして、同年 10 月、尾崎の地に新城を築く沙汰が下り、翌年の 3 月には明石にも新城を築く沙汰が下されます。明石城の築城地は、西国街道と明石海峡を押さえるのに最も適した要地として人丸山が選定されます。

元和 5 (1619) 年正月に石垣・土塁・濠の工事が始まり、同年 8 月に竣工、直ちに城普請に着手し年末に完成、忠真は船下城から本丸御殿に移り元和 6 (1620) 年の正月を迎えます。

■ 城づくりと並行して行われた町づくりは、剣豪・宮本武蔵が行ったとされている

現在の明石東部市街地の町割(都市計画)は、剣豪宮本武蔵によって行われたといわれています。忠政の長男・忠刻(たとき：千姫の夫)の客臣・宮本武蔵が姫路から明石に来て小笠原家の客分となり、明石の町割を行ったそうです。

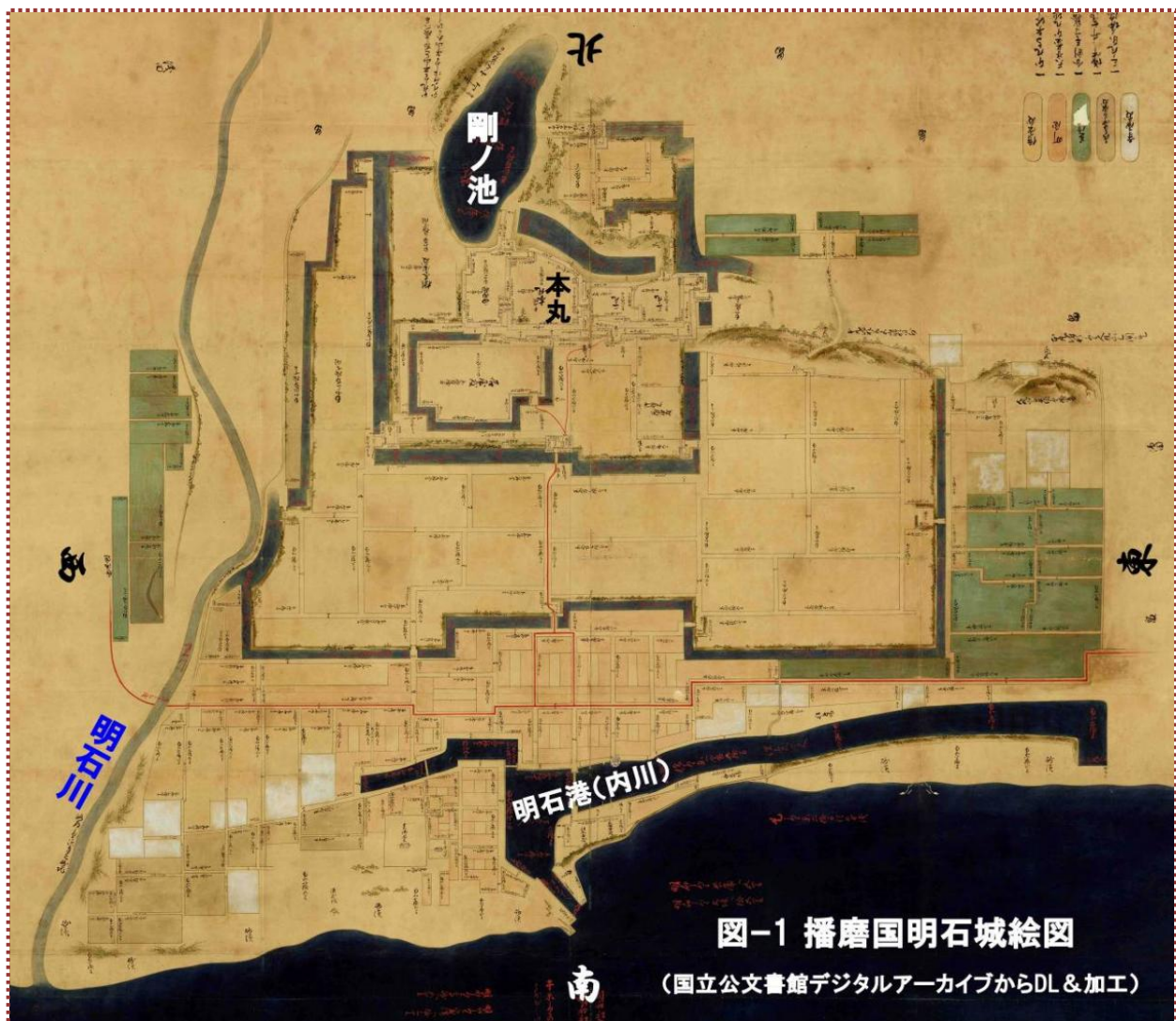
小笠原家入封までの明石の中心部は、船上城のある明石川河口右岸の船上一帯にありました。これに代わる新城下町として、大明石村と大蔵谷村の約 230 町歩の年貢地が潰され、ここに商工業者の居住する町屋が建設されました。

■ 小笠原忠真、城づくり・町づくりが一段落したのち明石港を築く

城づくりと町づくりが一段落した元和 7 (1621) 年 3 月、忠真は明石の浜にて築港工事を始めます。築港は大変な工事だったようで、砂浜を掘り下げ、その土砂を南側の砂洲の上に積み上げて港の防波堤とします。それが現在の中崎海岸の堤防です。港は翌年に完成し、船上の港から渡海船 14 艘、廻船 45 艘、茶船 3 艘が明石の港に移って来ました。現在の明石港の始まりです。

■ 明石港、大量の漂砂の流入に苦しむ

明石港は立派な港になりましたが、瀬戸内海が荒れると西からの潮流に乗って大量の漂砂が流れ込みます。特に冬は、西風のため漂砂が流入(沿岸漂砂)してすぐ港が埋まるので、岩屋神社南の浜に 60 間(≒109m)の突堤を築いて防ぐことにしました。



すると、今度は狭い海峡の潮の流れに変化が生じて、対岸の淡路の海岸や田畑に被害が及び（この程度で影響が出るとは思えませんが…）、淡路側から苦情が入ったので突堤の長さを 1/3 に縮めることになってしまいました。

その後も漂砂の被害は収まらなかったため、毎年 3 月 3 日から 5 日までの干潮の日に忠真が先頭に立ち、藩士全員と城下の町民 1 軒毎に人夫を出させて鋤簾（じょれん）を引き、港内に堆積した砂を浚えました。以来、船の入港に支障がなくなり、明石の港は「宝の船入」といわれるほど賑わったそうです。

また忠真は、寛永 2（1625）年に東波止、すなわち落船置場である「御船宮」を造るため港内を拡張し、これにより南北に分断された町をつなぐため、坊主橋（恵比須橋）・御茶屋橋（大黒橋）・思案橋などを架けました。

図-1 は「播磨国明石城絵図」です。正保元（1644）年に幕府が諸藩に命じて作成させた城下町の地図「正保城絵図」を基本にしていますが、細部は異なり、国立公文書館内閣文庫所蔵の日本分国絵図「播州明石城図」とほぼ同一の図です。「正保城絵図」は、城郭内の建造物・石垣の高さ・堀の幅や水深といった軍事情報が精密に描かれているほか、城下の町割・山川の位置・形が詳細に描かれています。

藩主が代わった寛永 10（1633）年には、波門崎の石垣が築かれています。その後も港口がたびたび漂砂で埋まることから、藩主たちはその都度石垣を築いて港口の機能を高めたり、土砂の除去作業などに追われたりしました。

享保前期（1716～1721 年）の地誌『明石記』に、当時の明石港を描いた「内川の図」があります。港の入口である波門崎は幅 40 間～88 間（≒73m～160m）もあり、東に「内川」と呼ばれた細長い内港、西にも 2 ヶ所の内港を持っていました。港の入口には舟入番所が置かれ、防波堤として築かれた中崎には、藩主の御茶屋（浜屋敷）・米蔵・御蔵・船揚場などがあり、船手組の人たちが住む東御水主町が置かれました。東の内港には船宮（御座船係留所）があり、白鷗丸、光陰丸という大船など 14 艘もあり、後には西洋丸、明石丸などの大船も造られました。

四代藩主・大久保季任（すえとう）の時（1639～1649 年）、港の規模は南北 2 町 20 間（≒255m）、港口 12 間（≒22m）、水深 3 尺（≒0.9m）で、水深が浅いため大型船の入港は制限されていました。

天和 2（1682）年の越前松平家入封以降も漂砂の害は続きました。享保 6（1721）年には内港の永代掘りが始まりますが、元文元（1736）年、藩は砂留役所を置いて砂船で除去作業を行うなど港の維持管理に頗（すこぶ）る手を焼いたそうです。また、宝暦 2（1752）年には、町人らが新波止を築いています。

■ 明治以降の明石港

明治維新後、明石港は一般に開放され、定期航路も開設されて活況を呈します。淡路経由で四国と結ぶ玄関口としても重要な位置を占めます。大正 10（1921）年には県の指定港になりますが、近代港湾としての機能を欠き、特に港の入口が狭かったため避難港としても不備で、定期航路や運搬船の入港は頭打ちになり、中核港湾としての発展は望めませんでした。

昭和 29（1954）年に国道 28 号（明石－淡路－徳島）の一部としてフェリーポートが就航することになり、そのために昭和 33（1958）年から港湾特別整備事業により東西に外港を、さらに物揚場、防波堤、埠頭用地が建設され、近代港湾として脱皮しました。

昭和 30（1955）年には乗降客数が 118 万人だったが、昭和 39（1964）年には約 3 倍の 329 万人に激増しています。



写真-3 大正時代の明石港（伝馬船で上陸する人々）
（『明石港の「みなと文化」』から引用）



写真-4 明治時代の明石港の内港。左は錦江橋。
（『明石港の「みなと文化」』から引用）



図-2 明石港周辺の地図

■ 芭蕉の国内行脚西端の地・明石

貞享5(1688)年4月20日、45歳の俳人・松尾芭蕉は弟子の坪井杜国(とく)を伴って明石にやってきて下記の句を詠んでいます。訪れた目的は歌枕として有名な明石の風光をわが目で確かめるためと、歌聖・柿本人麻呂の塚に詣でるためといわれています。

この句は、芭蕉が国内行脚西端の地・明石で詠んだ俳句で、紀行文『笈の小文』の中の「明石夜泊」と題する有名な句です。題は「夜泊」となっていますが、明石には泊まらず須磨へ引き返して泊まったそうです。

蛸壺や はかなき夢を 夏の月

「夏の夜は短く、月がもう中空にのぼっている。この短い夏の夜の間、水底では蛸壺の中で蛸が短い夢を結んでいる。明日は捕られるはかない命とも知らないで」という意味で、この頃から明石の蛸は有名だったようです。



写真-5 芭蕉句碑(明石海峡大橋が見える)

柿本神社前の展望台に立つこの句碑(写真-5)は、芭蕉の七十五回忌にあたる明和5(1768)年10月に加古川の俳人・松岡青蘿※1(せいら)が門人たちと共に建立したもので、当時は、参道麓の道端にありましたが、後に地震で壊れたため文化12(1815)年2月に青蘿の門人・玉屑(ぎょくせつ)らによって再建されました。

その後、境内を何度か転々としたあと、俳人・魯十が現在の碑を建て直したといわれています。

※1 松岡青蘿:「蕉門中興俳諧六家」の一人。江戸詰播磨国姫路藩士の家に生まれ、同藩士武沢氏の養子となるが、身持不謹慎(一説に賭博が原因とか)として23歳の時藩を追われ、松岡氏に復す。その後、諸国を遍歴し、明和4(1767)年、大庄屋・中谷慶太郎の幹旋で加古川に三眺庵を結ぶ。俳諧は江戸において美濃派玄武坊に入門、芭蕉顕彰に尽力する。



写真-6 柿本神社（右端に「八房梅」）



写真-7 柿本神社の西隣にある月照寺と八房梅

■ モノローグ

柿本神社も月照寺も、元は明石城本丸にあったものを忠真が現在地に移したものです。

元禄 15（1702）年に赤穂浪士の大石内蔵助と間瀬久太夫が仇討ちの成就を願って柿本神社に参拝した折に、間瀬久太夫が持参した鉢植えの梅を移植して祈願の印としたそうです。

今は、柿本神社および隣の月照寺に接ぎ木や実生などの方法で増やされた八房梅（やつぶさのうめ）が見事な花を咲かせています。例年、3 月初旬には満開になるはずが、今年は下旬にずれ込みました。



写真-8 柿本神社「八房梅」

また、明石銀座通りに面した老舗和菓子店・朝霧堂には「八房の梅」と名付けられた銘菓があります。やわらかな餅に梅肉を練り込んだ一品で、何となく「柚餅子（ゆべし）」の食感がしました。

八房梅（やつぶさのうめ）

バラ科アズキ属の落葉樹でウメの一変種。樹高は最大で4m 程度。2～3 月頃、葉の展開前に紅色で八重咲の花をつけ、花後に花托上に 3～5 個の核果を実らせる。和名の「座論梅」は、本種の花が枝に対になって開花する様子を、中国の賢人（孔子とその弟子）が座論している様子に見立てたものと言われている。故・牧野富太郎博士は、本種の場合 1 箇所に実が集まって結実し熟す前に落果する様子を、座論（数人が集まって議論を闘わせ、論に負けた者から座を外す）に例えたものとしている。他にも諸説あり。



写真-10 銘菓「八房の梅」

【参考資料】

- 1 『明石港の「みなと文化」』 橘川真一 平成 22 年 8 月
<https://www.wave.or.jp/minatobunka/archives/report/064.pdf>
- 2 『明石藩略史』 黒田義隆編著 昭和 56 年 10 月
- 3 『播磨国明石城絵図』 国立公文書館デジタルアーカイブ
<https://www.digital.archives.go.jp/gallery/00000002017>
- 4 『史話明石城』 黒田義隆 昭和 50 年 11 月
- 5 『明石城をめぐる歴史の旅』 黒部 亨 平成 12 年 8 月
- 6 『百句繚乱 俳聖芭蕉を仰いだ人々 近世播磨の俳諧』 姫路文学館編 平成 17 年 4 月
- 7 『明石港』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 8 『八房梅』 GKZ 植物事典
<https://gkzplant.sakura.ne.jp/mokuhon/syousai/yagyou/ya/yatubusaume.html>

※発行：令和 7 (2025) 年 10 月 『ひょうご水百景』 No.221

改訂：令和 8 (2026) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.221